

2-1 学部等の理念・目的及び学部等の使命・目的・教育目標

- A群・大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性
- A群・大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性
- C群・大学・学部等の理念・目的・教育目標を検証する仕組みの導入状況
- C群・大学・学部等の理念・目的・教育目標の、社会との関わりの中での見直しの状況

学部全体

社会の高度化、情報化、国際化が進む一方で、人間の生存の危機を生み出している現実がある。人間存在の重みそのものが問われている今日にあって、キリスト教信仰に基づく本学の文学部の役割は大きい。世界の現実、自国の文化理解と豊かな国際理解とが深く関わり合っていることを私達に教えている。それは、世界の人々との多面的な結びつきが私達の生活を支えているからにほかならない。人間の社会的連帯と人類の視野をもった人間の形成をめざす大学教育の目的も、この点に関わっている。大学共同体において、**文学部こそが、人間そのもの、人間の多様な営みをトータルに理解するための学問研究に携わっている**のである。

本学部では、このような理念を教育学科、英米文学科、フランス文学科、日本文学科、史学科、心理学科の6学科の連携した研究と、文学部共通科目・外国語科目をも加えた教育によって具体化している。目標としているのは、**基礎的教養と各専門分野の学問を身につけ、それによって人間を多面的・多角的に理解する力を持った人材を育成すること**である。

このように、本学部は人間の営為を研究する、学問の根幹をなす学部であるといつてよい。呼称は文学部であるが、上記理念が示唆するところは、実質的にはリベラル・アーツを研究する総合的な人文学部であり、上記6学科を擁する体制は、その理念にふさわしいものといえよう。

本学部は、1949年、学制改革による青山学院大学の開設時に設置された、本学の誕生の時から存続する伝統ある学部である。卒業生の総数は、2005年度までに、教育学科9,540名、英米文学科20,733名、フランス文学科5,029名、日本文学科5,128名、史学科4,723名、心理学科243名、第二部教育学科4,917名、第二部英米文学科10,029名を数える。1961年に廃止された第二部基督教学科29名、1977年に廃止された神学科313名を含めれば、これまでに60,684名を社会に送り出してきたのである（『大学概要』）。それらの卒業生は、教育・文化関係をはじめとして、社会の幅広い分野で活躍している。

本学部は現在6学科制の下に、文学、言語学、哲学、歴史学、教育学、心理学、社会学、芸術学、スポーツ科学などの学問分野を擁している。これら諸分野の存在は、**学際研究の可能性を大きく広げ、人間と文化の本質を究明するための多様なアプローチを可能にしている**。しかも本学部の特徴は、**学問的課題の探求が外国語教育を含めた豊富なカリキュラム、少人数制ゼミナール、実習などによって行われることにある**。

本学部の学問は各々の体系を有し、時代を超えて継承されるべきものである。その本質と理念は今後とも堅持してゆかねばならないが、同時に、社会の変化に伴って大学も大きな変革を迫られている時代において、その理念をいかに現実化するかについては、絶えず検証と改善・改革への努力を続けていかなければならない。具体的には、各学科において、以下に述べるように、不断の改革が進められている。

本学部の理念は、毎年刊行される『進学案内』や『学部パンフレット〔文学部〕』等の冊子に記載し

ているほか、ホームページに掲載しており、教職員・学生・受験生はもとより、社会一般に広く周知されるよう努力している。ただし、これらがどの程度有効に機能しているかについては、従来、充分に調査してきたとはいえず、今後、有効性の検証が課題となろう。もとより、理念の文章を広報の媒体に載せることのみが理念周知の方法ではなく、**教職員が日々の実践を通じて、この理念を学生に体感させてゆくことも重要であろう。**

教育学科

本学科の理念・目的は、幅広く深い知識を教養教育によって学ばせつつ、教育学に関する専門教育を融合させて、より人間的な成熟に向けての歩みを確かなものとさせることにより、心豊かな社会の実現をめざして自らを向上させ、愛と奉仕の精神をもってさまざまな方面で積極的に行動し責任を果たすことができる知性と教養をもった社会人へと成長する人材の育成である。

そのための教育目標は、子供と青年の発達及び自己実現の仕方、生涯にわたっての役割と責任の果たし方、人間的な成熟の諸相、人格形成の過程、文化と発達及び学校教育の在り方、国際理解及び情報社会における学習と人間関係の在り方など、人間の成長・発達・形成に関する学生の多様な関心を、教育学の学問的な手続きを踏まえた、より説得力のある知識としてその理解を深めさせ、併せて、教育の問題を広く日本と世界の歴史・社会・文化の問題として理解させ、その構造や機能を明らかにする科学的な探求心を修得させることである。

具体的には、乳幼児期から老年期にいたる人間の発達・学習・社会化・成熟といったライフサイクルのそれぞれの段階で営まれる人間形成に関するさまざまな課題を、教育学及び隣接分野における学問分野の先行研究と最新の研究成果を踏まえて、科学的・人間学的・総合的に学ばせることである。

1950年に、本学科は、私立大学において**特色ある教員養成**を行う目的で認可・設置された。その中、第二部教育学科は、勤労学生への勉学機会の提供を目的とし、夜間に授業を行う課程として位置づけられた。爾来、本学科は「**広い視野と豊かな人間性をもった**」**教員の養成**に55年間にわたり取り組み、幼児教育から高等教育まで幅広い分野に有能な人材を輩出している。2006年3月までの青山学院大学卒業生全体において、教員となった者は、幼稚園、小学校、中学校（中等教育学校を含む）、高等学校、盲・聾・養護学校の専任教員が6,496名であり、この内、幼稚園311名と小学校2,199名の専任教員は教育学科の卒業生であり、中学校1,450名、高等学校2,359名及び盲・聾・養護学校129名の中にも、少なくない数の教育学科の卒業生が含まれている。また、社会教育の専門職である司書（教育職員資格の司書教諭も含む）、社会教育主事及び学芸員の諸資格を取得する課程を設けているが、最近3年間（2003－2005年度）の状況としては、教育学科は年度順に40名、19名、8名であり、第二部教育学科（司書教諭、社会教育主事のみ）も同様に年度順に、8名、12名、12名がこれらの資格を取得している。そして、その内の若干名が図書館等に勤務するとともに、学校及び企業においても諸資格取得で学修した専門性を生かしている（学科パンフレット「教育学科」）。

一方、本学科では、教員養成のみにとどまることなく、人間と社会についての幅広い視野の形成をめざし、人間科学に関連する幅広い領域の教育課程を整え教育を行ってきたことから、教員のみならず、サービス業、卸・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、マスコミ関係、サービス業、公務員などの多様な分野においても、有為な人材を輩出してきた。したがって、**教職及び多様な分野における有為な人材の輩出が本学科の人材養成の特色である。**2006年3月までの累計卒業生数は教育学科が9,540名、第二部教育学科が4,917名である。

第二部教育学科については、一貫して勤労学生に学修の機会を提供し続けるとともに、近年は社会人の再教育や自己啓発の場として、生涯学習の機関ともなっている。

2001年度より、教育学科心理学専攻と第二部教育学科心理学専攻がそれぞれ心理学科昼間主コースと心理学科夜間主コースとして分離し、教育学科は教育学専攻のみとなったため、教育学科教育学専攻という名称は用いず、教育学科として新たな教育課程を整えた。学校における不登校、校内暴力、いじめ、学級崩壊等の教育病理現象が依然として課題となっていることなど教育を取り巻く実際的な状況への対応を含めて、本学科は、2001年度以降、**専門教育において教育学の基礎理論から実践的な知識や技法に関わる多様な教育課程を整えることにより、本学科の理念・目的及び教育目標が達成できるよう取組んでいる。**

このような本学科におけるこれまでの取組みは、高度及び幅広い専門職業人の養成ならびに生涯学習機会の拠点など高等教育機関の1つの在り方として、「学校教育法」第52条の趣旨に合致しているとみなすことができる。

なお、**教育目標や人材養成の方針は、青山学院教育方針と青山学院大学の理念を基にして、学生が教育学を学ぶ観点から発展させたものであり、『学科パンフレット〔教育学科〕』の冒頭に明示して在校生、受験生に告知している。**併せて、『学部パンフレット〔文学部〕』や「学部案内ホームページ〔文学部・第二部〕」に掲載し広く社会に周知している。

本学科の教育目標の実現に向けて、教育課程（カリキュラム）及び学習・研究指導においては、教養教育との接合を図りながら、専門教育において、人間の成長・発達・形成に関わる多様な領域を教育学の基礎理論から実践的な知識や技法の習得に関わる科目群まで、5つの学群（第二部教育学科では観点として位置づけている）を設け、学生個人の興味・関心、学習意欲や探求心に応じて、幅広い中から選択して学修を進めることができるように工夫をしている。また、教育学とその隣接領域の成果を自由に学び取り、人間と社会の在り方について幅広い視野を形成することができるように、文学部共通科目、他学科・他学部の学科専門科目も、学科科目の履修とともに自由選択科目として教育課程上に位置づけて、かなり自由に学修することが可能となっている。さらに、本学科の人材養成の主要な目的である教育職員及び社会教育指導者養成のために、幼稚園・小学校・中学校（国語科、社会科、英語科）・高等学校（国語科、地理歴史科、公民科、英語科）及び司書教諭の教育職員免許状ならびに、司書、社会教育主事、学芸員の諸資格取得のための専門科目を設けている（『授業要覧〔文学部履修ガイド〕』『授業要覧〔第二部履修ガイド〕』『学部パンフレット〔文学部〕』に記載し学生に周知している）。そして、その成果は、前述したように卒業生の実態となって現れているとみなすことができる。

また、このような本学科の取組は、今日の急激な社会の変化や文化の進展に伴い、人間の成長・発達及び学校教育の在り方、生涯にわたる人格の形成、社会の情報化と国際化における人間の在り方など、人間と社会や文化をめぐる多様な課題を、総合的かつ人間科学的に研究すべき教育学への期待、ならびに教育の実践的な分野では、いじめや不登校に加えて、学力の格差や低下、児童虐待などの新たな問題も生じている状況などに鑑み、大学としての取組として適切であるにとらえている。

本学科の理念・目的及び教育目標を達成するための不断の取組として、**教育課程及び授業の改善・充実に努め、本学科内に教務・カリキュラム運営委員会及び将来戦略委員会カリキュラムグループを設置して検討している。**

以上、本学科の理念・目的及び教育目標について、現状はそれらをほぼ実現する方向にあると判断している。一方で、社会の変化及び文化の進展は連続するものであり、それらに対応しつつ、教育内容・方法の改善は不断に進めていく必要があることを確認している。

英米文学科

本学科の理念は、「**英文学・米文学・英語学・コミュニケーション学の4分野の専門的及び学際的研究を通して、英語圏の社会・文化・思想に関する認識を深め、人間性を探求することを理念とし、国際的な視野をもって社会に貢献できる個性的で創造性豊かな人材の育成を目標とする**」。

英米文学科は1949年に創立された「英語の青山」を代表する学科である。55年を超える歴史やそこから育まれてきた伝統を尊びつつも、旧態に甘んじることなく、新しい時代の変化に対応した研究・教育水準を達成すべく努力している。具体的には、1998年12月9日の英米文学科分科会にて機関承認された本学科の理念として、上の文言をあげておきたい。

以上から理解されるとおり、本学科の専門分野は4本柱と称する上記4分野を根幹とするものだが、ここ数年に見られる姿勢としては、国内外の学会の潮流を見きわめ、また学生の学習の希望に応える形でコミュニケーション分野における教員の拡充を図り、同時にコミュニケーション系科目の充実をめざしていることがあげられる。次いで、英語という言葉と英語圏の文化の研究に立脚しながら、国際人の養成を目標として掲げているように、あくまで本学科の基盤は言語文化に中心をおくものといえる。

1949年の創立以来英米文学科は20,733名、翌1950年創立された第二部英米文学科は10,029名の有為な卒業生を2005年度までに輩出し、多少とも社会に貢献できたと自負している。**学校教育法第52条**の趣旨に則り、知識の教授を前提とした、知的道徳的应用能力を学生生活を通じて啓発してきたものと思う。

前述した4本柱のどの専門分野にも共通する点は英語の運用能力を高めようとする意思である。一定水準の英語力まで学生時代のうちに達成せしめ、英語を使って社会で活躍できる人材を供給することを目指している。その結果、英語を職場で使用できる環境への就職を希望する学生の他に、教育職への就職、大学院進学、留学等をめざす学生が多いのも特色である。

上記の理念は、『学部パンフレット〔文学部〕』及び『学科パンフレット〔英米文学科〕』といった学科を紹介するパンフレット類に、例えば前者の「教育方針と特徴」、後者の「大学で学ぶこと」といった文章などに敷衍した形で述べられている。同様に、**本学科公式ホームページ内にも「教育方針」と「特色」の項で解説されている。**

英語の実践的運用能力の育成に基づいて、英文学や米文学の研究とならんで、英語学やコミュニケーション学を合わせて4本柱と位置づけている点に本学科の最大の特色がある。とくに英語の運用能力の訓練と通訳・翻訳をはじめとするコミュニケーション分野の充実を図っているのは社会的要請の変化に柔軟に対応して取られた方策である。

オープン・キャンパスで説明に力を注ぐのもこの点が多い。ただ、学科名称に英米文学を名乗っていつつ、英語学やコミュニケーションにも重点がおかれている本学科の特色が一般にやや理解されていないくらいもなしとしない。また近年ややもすれば入学定員を上回る学生数が在籍することもあるが、学科の掲げる理想を実現するためには必須の少人数のクラスサイズを守るべく、授業科目のコマ数には細心の注意を払っている。

フランス文学科

フランスの文化は、中世以来、ヨーロッパ文明の中心を成し、とくにその文学は、優雅と機知、真摯な追求と寛容な理解とがみごとに調和する人間探究の文学として、ヨーロッパ文学を常にリードし続け、日本の近代以降の文学にも大きな影響を及ぼした。

その文化と文学を担うフランス語は、明晰かつ極めて理性的な言語として知られ、長い間、ヨーロ

ッパ世界の共通語だった。世界第一の国際語の地位は英語に譲ったが、今日でも主要な国際語としての地位を保っている。

1962年の創設以来、本学科は、**文学を中心に広くフランス文化全般に触れることによって、先入観にとらわれない柔軟で人間性あふれる思考力と感性を磨く場**たろうと念願してきた。価値観の多様化が進む現代において、均衡のとれた的確な判断力と行動力をそなえた人間を形成するうえで、この理念はますます価値を高めている。こうした観点から、すべての基礎となるフランス語の習得にはとくに力点をおき、文章を読む能力はもちろんのこと、実際のコミュニケーションに必要な、聞き、話し、書く能力の発達を重視している。このように、語学力と総合的判断力の涵養を通して、国際化の進む日本の社会において、ひいては国際社会の中で存分に能力を発揮し活躍できる人材の育成をめざしている。

1962年の設立以来、本学科は、現在までに5,029名の卒業生を世に送り出してきた。(2006年5月1日現在)。**本学科設置時の設置事由** (『文学部フランス文学科増設届出書』、昭和36年)に「フランス文学科の設置は、(中略)既存の英米文学科と相俟って、大陸系文学研究の飛躍的充実と本格的な研究とを期待し得るものであり、同時に比較文学研究の分野における発展をも可能にするもので、意義はとくに大きい。(中略)さらにフランス文学あるいはフランス文化に対する社会的関心、文化的要求は、戦後にわかにたかまったが、現在フランス文学を専門科目とする学科を設置している大学が極めて少ない実情よりみて、本学文学部内に当該学科を新設することは、このような社会的要請に応えるものであり、同時に本格的なフランス文学の研究を通じて西欧文化ならびに人間性に対する正しい理解に資する社会的意義も極めて大きいものがある」とある。

本学科はこのような目的のため設立され、現在まで43年を経ている。この間、時代の変化・社会的要請に応じて、1996年にはカリキュラムを全面的に改定している。

留学制度の面では、1991年にフランス国立フランシュ・コンテ大学応用言語学センターと本学との協定締結が実現し、学部学生が同センターで1年間学ぶための語学留学制度が開設された。2004年からは学部学生、及び大学院生がより専門的な学問を修めることを目的としたパリ第3大学との協定制度も実現を見た。

2003年の相模原キャンパス開学にあたっては、旧厚木キャンパスの「フランス語講義準備室」に代わって、フランス文学科合同研究室が設置されるようになった。その結果、青山キャンパス同様、相模原キャンパスにも、フランス文学科の教育・学科運営の中心となる場所が確保された。

本学科の教育の主たる特徴を2つあげておきたい。1つ目の特徴は、人間性探究の文学といわれるフランス文学を中心に教授することにより、**人間性についての理解を深め、先入観にとらわれない柔軟で判断力に富んだ人材を養成する**という点にある。2つ目は、どのような専門分野を選択する場合でも、その前提となるフランス語の力を徹底的に身につけることを必須条件としている点である。こうした語学力の上に立って、フランス文学、思想、語学、文化について学び、そこで学んだ知識と思考力を活かして均衡のとれた的確な判断力と行動力を備えた人材を養成することをめざしている。これまで実際に、教育、報道、通訳・翻訳、旅行業など多様な職種につき、日本の内外で能力を発揮して活躍する有能な人材が育っている。

本学科が上に掲げた理念・目的は、憲法における「学問の自由」や**学校教育法52条**の趣旨に沿った、わが国のめざす高等教育機関としての役割に配慮し、かつそれを果たすものと自負している。

本学科の**教育目標**は、『進学案内』、『学部パンフレット〔文学部〕』、『学科パンフレット〔フランス文学科〕』、学部案内ホームページ〔文学部〕に掲載されており、教職員、学生、受験生を中心に、社会一般に対し周知するよう努めている。

このような学科の理念・目的は現時点で概ね実現されているといえることができるだろう。ただし、**社会的要請の変化に伴って変えていかなければならない点もある**。近年、本学科に入ってくる学生の関心は狭義の文学の枠に収まらず、現代フランス事情、生活、食文化、ファッションと広範な分野にわたっている。さらにはフランスのみならずフランス語圏について研究したい、ヨーロッパ共同体におけるフランスの位置づけについて学びたいといった要望も聞かれる。また、フランス語の実践的な能力を身に付けることを主たる目的に入ってくる学生が増える傾向にある。このような傾向に応える方策の1つとして、**2004年度よりフランス人専任待遇教員を1名増やし、フランス人教員が直接フランス語で行う授業を増やしている**。また、学生の幅広い関心に応えるため、他学部のフランスに関わる授業を本学科学生に履修可能な授業とする等の措置を講じている。専任教員の専門の枠を超える領域についてはそれぞれの分野の専門家に出講を依頼し、**可能な限り諸分野の授業の充実を図っている**。

フランス語の実践的能力を養成するための教育についても会話の授業の1クラスの人数を少なくし、1人1人の学生に木目の細かい指導が可能となるよう努力してきたが、今後、語学教育をさらに充実させるためにはより一層少人数で教員との活発なやり取りが可能な授業を増やす方向を検討していかなければならないと考えている。

日本文学科

本学科では、上代から近現代にいたる幅広い日本語・日本文学の素養を身につけると同時に、**国際的視野に立って考え、日本文化を位置づけることのできる人材を育成すること**を目標としている。そのために、日本文学・日本語学・漢文学の各分野を網羅する教員を配置して、日本文学・語学に関わるさまざまな興味・関心に対応できる体制を築いてきた。さらに、1996年度から日本語教育コースを開設、従来の学科の内容に相当する文学・語学コースと並ぶ**2コース制**をとって、より広い視野から日本語・日本文学・日本文化を理解することができるよう努めている。このように質量ともに豊かな教員配置の一方で、学生数は多くはなく、教員と学生が親密に語り合うことのできる雰囲気の中で、**学生が自ら調べ、考える力を育てることを重視**して教育に励んでいる。単なる知識の寄せ集めではなく、総合的な日本文学の研究理解から、普遍的な人間性へと目をひらき、心をひらくことのできる人間こそ、真の国際人というべきであろう。そうした学生を育てることが、**本学科の教育目標**である。

さて、本学科は、**既存の諸学科と相俟って比較言語及び文学研究の分野における研究の充実、さらに西欧の精神文化との総合、世界的視野に立つ新しい日本文学（日本文化）研究の分野における発展を期して、設置されたものである**（「文学部日本文学科増設届出書、一、学校設置の事由」昭和40年9月30日参照）。それ以来、2006年3月までに、5,128名の卒業生を、社会に送り出してきた。それらの卒業生は、本学科の学問に直接関わる教育や出版関係などをはじめとして、社会の幅広い分野で活躍している。1996年度に開設した日本語教育コースからも、日本語教育に関わる卒業生を輩出し、社会の要請に応えている。さらに、2004年度からは5年計画で、毎年、日本文学研究に関わる国際シンポジウムを開催することとし、国際的視野を有する学問と教育の発展のために努力している。

そのような理念とこれまでの沿革については、毎年刊行される『進学案内』『学部パンフレット〔文学部〕』『学科パンフレット〔日本文学科〕』等、また、**学科独自のホームページにも掲載し、周知を図っている**。

本学科では、カリキュラムの改革を重ね、とりわけ少人数の演習を多数開設して、自ら学び、思索する学生を育てるように努めている。これは、単なる知識の習得にとどまらず、広い視野から思考することのできる人材育成に努める、学科創設の理念を生かしたものだといえよう。学科の理念が、そのような、教員と親しく会話できる授業を通じて、学生に浸透することも期待されるといえよう。

また、若者の活字離れ・文学離れが危惧される現在、学生に対して文学・語学の魅力をどのように訴え、導いてゆくかは、多くの大学に共通する悩みであろう。本学科では、2002年度以来、「表象文化論」3コマ、また、夏期に集中講義2コマを開設して、多様な角度から日本文学・文化をとらえる視座を切り開こうと努めている。学科の理念や従来の成果を生かした上で、今後も不断にこうした方向の工夫を加えてゆくことが必要であろう。

史学科

現在、世界は政治・経済・文化のあらゆる分野において、かつてなく激しく揺れ動いている。諸地域の変動は私たちの生活はもとより社会を形づくってきたさまざまな価値の体系にも大きな影響を与え、従来の考え方や、生き方に対する根本的な見直しをうながしているように思われる。

本学科はこのような激動の現代社会を前に、あらためて過去の人類の歴史的な営みを批判的かつ科学的に見つめ、広い視野のもとでそれらを正しく認識することにより、“いま”に対する深い洞察力をたくわえ、ひいては私たち個々の未来への展望を切り拓くことを理念とし、歴史研究を通じて自己を確立し、複雑な現在の世界情勢を客観的に分析する力を培うことにより、社会に貢献できる人材を養成することを教育目標の1つとして掲げている。

大学における歴史教育は、現在我々が生きる時代を正しく理解するために、現代社会に内在する諸問題を歴史的に見る目を養い、歴史的に形成された諸問題を歴史的に解決する能力を育て、正しい歴史認識のできる人材の育成をめざしている。史学科でもその基本方針として「歴史を学ぶ目的は、ただ過去を過去として学ぶのではなく、現代の社会をより正しく理解することにあります。我々の生きている社会は日毎に複雑さを増し、否応なしに緊密な国際関係の中におかれています。我々には世界の歴史の動きについて偏らない知識と異文化を正しく理解し、受け入れる広い視野が求められています。このように過去の歴史を通じて人間とその社会についての広く、深い理解力を養うこと、それが本学の史学科の基本方針といえるでしょう。」(『学科パンフレット [史学科]』)と述べている。

本学科は1968年創設され、過去の人類の歴史的な営みを批判的かつ科学的に見つめ、歴史研究を通じて、自己を確立し、複雑な現在の世界情勢を客観的に分析する力を培うことにより、社会に貢献できる人材を養成することを理念・目的としている。それ以来、2006年3月までに、累計4,723名の卒業者を輩出してきた。それらの卒業生は、歴史学研究、歴史教育をはじめ、幅広い分野で、社会貢献を果たしている。

本学科では、創設当初の1960～70年代に最先端の領域であった東西交渉史の分野に重点をおいた学科編成をとっていたが、この点は40年近い今日でも伝統として受け継がれている。グローバルな視点と研究が求められている21世紀の現在、この学科の特徴はより強化されるべきであろう。また、1997年新設の芸術史コースは、全国でも他に例を見ないので、21世紀の新しい歴史教育を展望し、かつ歴史学研究の方法そのものを問い直す試みとして、本学科の新たな可能性を担うものである。しかし、カリキュラムなどに不備な点が少なくなく、芸術史概説の新設など、かなりの改善が行なわれたが、いまだ不備な点が残っており、早急な解決が望まれることも事実である。

現在は日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史の5分野のコースを有し、歴史系学科設置大学でも最も充実した編成といえる。これにより研究分野の拡大・充実に対する学生の要望に応えている。

憲法における「学問の自由」、学校教育法の趣旨に沿い、学科の理念・教育目標が設定されていることはいままでのない。このことは各分野5コースをもって対応し、教員は専任19名に加えて、世界各地域・時代の研究を網羅すべく2006年度では、53名の兼任教員を擁し、限界はあるものの学生の研究要望に対し充分応えているといえよう。

各コースでは史料講読・原典講読を必修とし高度専門職業人の養成を行い、幅広い職業人をめざし、特別講義等関連分野の授業によりその達成をめざしている。このため**本学科内に学芸員養成課程を設置し**、広く社会貢献すべく、各コース・学部・学科を問わずに学生を募集している。

こうした本学科の教育目標等は『学部パンフレット〔文学部〕』、『進学案内』、さらに2004年度以降は本学科独自の学科案内『学科パンフレット〔史学科〕』を刊行している。これには**本学科の理念・目的及び使命・教育目標・特色を述べている**。また、日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史の各コースの概要紹介を行い、全専任教員の「ゼミのテーマ・指導方針」をのせている。このほか、**文学部のホームページ上に、本学科の情報もあわせて公開されている**。

本学科の研究・教育成果は、『青山史学』（史学科研究室編、1969年～現在24号に至る）、『史友』（史学会編、1968年～現在38号に至る）が刊行されている。考古学コースでは『青山考古』（考古学コース編、1980年～現在21号に至る）を刊行している。また本学科の特色の1つとしている研修旅行の成果を纏めた『研修旅行レポート』（1970年～現在35号に至る）がある。

しかし、この複雑多岐にわたる現代社会に対応するために本学科の理想とする形態と現状には埋めがたい隔たりがある。理想の実現に向けた改善は演習・特講等の科目の中で年次により内容を変化させていくことが必要だと思われる。そのことは社会・学生等の要求に応えることになるだろう。

心理学科

本学科（昼間主・夜間主共通）の**理念・教育方針は、「心の専門家の養成機関として心理学を抽象的な学問ではなく、世の中に役立つ具体的知恵や実践的技術としての修得に重点をおく、まったく新しい学びの場を提供することをめざす」**である（『学部パンフレット〔文学部〕』）。この心理学科の理念・教育方針は、青山学院全体の「教育方針」及び「大学の理念」を心理学という領域に発展させたものである。

本学科は2001年に教育学科から独立して設立され、2005年3月に第1期生111名を、2006年には132名を送り出した（「大学基礎データ」表6）。

本学科では、**心理に関わる諸現象を感覚・知覚の基礎的領域から、社会・臨床の応用領域にいたる最新の研究成果をふまえて、「科学的」「人間学的」「総合的」に学ぶことを具体的な目的としている**。そのために、心理学の方法論として実験的手法や統計学的分析などの学習分野を設け、それらを基礎として実生活における応用分野への探求を図れるように、カリキュラムの上でも、学習・研究指導の上でも、さまざまな工夫をしている。さらに学生が心理学の分野に深いつながりをもつ哲学からの成果も享受できるよう「哲学的認識論」などの科目を学科科目として設けるとともに、本学科の母体となった教育学科との共通履修科目や、人間と社会の在り方について幅広い視野を形成することができるよう、文学部共通科目、他学科、他学部の学科科目がかなり自由に履修できるようにしている（『授業要覧〔文学部履修ガイド〕』）。

20世紀の終盤において社会的潮流の中で求められてきた「**心の専門家**」の**養成の一環**でもあり、さらに高度専門職への基礎養成課程として幅広い教養と学識を涵養する場を整備し、発展させていると自負している。

夜間主コースは、社会人が大学での学問研究を通して社会の進歩に対応しようとしたり、自己啓発のために生涯学習の場を求める人たちのための教育という役割を重視し、臨床心理学、社会心理学や発達心理学など応用心理学の領域に重点をおいたカリキュラム構成によって、社会人の要望に応じている。

憲法に謳われる「学問の自由」を具体化した**学校教育法**には「大学は、学術の中心として、広く知

識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」(第52条)とある。心理学科の目標とわが国のめざす高等教育機関の目標は軌を一にするものである。近年の社会の急激な変化から「心の専門家」の社会的要請が生じてきた。**学芸の裏づけを基礎に広く実践の場で確固とした能力を発揮できる人材の育成をめざしている。**

設立間もない本学科は、理念・目標に向けて邁進している。しかし、現状に甘んずることなく改善を重ねる必要は常にある。とくに「心の時代」という社会的な要請に対して心への問いかけに学問的な観点から真摯に応ずるのは容易ではない。社会や時代の要請に応えつつ心理学の広範な領域を網羅し、幅広いカリキュラムを整備することが、設立間もない本学科にとって急務である。一方、夜間主コースにおいても、基本的には昼間主コースと同様のカリキュラム編成を取っているが、物理的な時間数の少なさのために、学生の履修計画を難しくしていることは否めない(『授業要覧〔文学部履修ガイド〕』)。

これらの諸問題に対して、教授陣の充実を図るため、2001年度の発足時に2名の心理学教員をまた、2004年度には1名の哲学教員を増員し、2005年度に臨床心理学の実践面を補強するため臨床心理学専門の助手を採用した。

さらに夜間主コースの履修上の問題を解消するため、2007年度から両コースを統合して本学科は単一コースに改組した。